

---

**D I M E N S I O N T R A V E L E R 次元を旅する者たち**

ピス田 智男

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

D I M E N S I O N    T R A V E L E R    次元を旅する者たち

### 【Nコード】

N 2 1 7 8 U

### 【作者名】

ピス田    智男

### 【あらすじ】

自分の欲しいものは何でも手に入れようとする、やんちゃな高校生、向むかい 夢路ゆめじはある日、謎の切符を拾う。

するとその日の学校の帰り道、杖を持つ魔法を使うガキ？に気絶させられ、次元転送列車 D I M E N S I O N    T R A I N に乗せられる。今までの悪事を償うために携帯変形武器クエスト T    ウエポンを自由自在に使い、魔獣退治などいろんな種類の依頼クエストをただ働きで受けることに……。

## はじまり

俺の名前は向むかい 夢路ゆめじ。

高校二年生のいわば問題児だ。

何でも自分が欲しいと思ったたり、気になったものは人を殴り飛ばしてでも人から盗ったり、捨ったりしてしまう。

そう、あの日も俺のこのどうしようもない性格のせいで、とんでもないめにあってしまったのだ。

その日、俺はいつものように学校の帰りにトンネルを自転車で通り抜け、川原を通り過ぎようと自転車をこいでいた。

そのとき俺は、切符のようなものが落ちているのを見つけた。

いや、見つけてしまったのだ。

## 第一話 運命の出会い

「何だこれ？」

俺は自転車を道の脇に止めて、川原に下りてみた。そして、そこに落ちていたものを拾いあげてみる。

「おゝい夢路。エロ本なんか探してねえーでちゃんと家に帰れよ」

振り返ると近所のダチがよろよろになりながらも片手運転をし、声をかけてきた。

返事をするのが面倒だったのでダチに向けて、失笑だけをする。手につけている腕時計をふと見た。

もう7時だった。

この腕時計もこの前に道で歩いていたチンピラから奪ったものだ。その切符らしきものをポケットにしまい、俺は自転車にとび乗り、家に向かって走っていった。

3

しばらくして、路地裏辺りで「パキッ」というガラスでも踏んだような音が聞こえてきた。

もしかと思い、タイヤを見るとそのもしやだった。パンクをしたのである。

「あゝ。もう、こんな時にイゝ！」

しんと静まりかえった住宅街に夢路の悲鳴とも取れる声が響いた。まだ家までそこその距離があるのに自転車が使いものにならなくなってしまうのだ。

「まあどうせ拾った自転車だろ・・・」

どこか近くでかすかに声が聞こえたので驚いて声のするほうを振

り向くと、そこには杖を持った小さい男の子？が立っていた。

「おいっ！こらガキ！こんな遅くに外に出歩いてないで、家に帰って、ママに絵本を読んでもらいながら、おネンネでもしてろっ！」

俺は、そう吐き捨てて、前に進みかけた。

んっ？このガキ、さっき俺のチャリは拾ったやつっていったよ  
うな気がするけど・・・なんで、わかつたんだ？

今更ではあるが俺は異変に気づいたのだった。

だが、しょせんあのガキがてきとうにぬかしたんだろう。

「おまえ、ワシのことをガキだと思つてなめとるじゃろ。痛いめにあわずぞっ！！！」

「ハア？だれがおまえだとこのクソガ・・・」

そこまでいいかけると俺の体には激しい痛みが襲い、気がつくとも  
気を失っていた。

目が覚めるとそこは列車の中だった。

目の前には色々な風貌の人々やさっきのガキがいた。

「テメエさつきは、何をし・・・」

また、途中までしゃべりかけたところで今度は体中に電撃がはし  
った。

「また、暴言を吐いたら電撃くらわすぞっ！」

前に立っていたガキがいった。

どうやら、どうやったのかわからないが、このガキが何かしたら  
しい。

「・・・あな・・・たは、一体・・・？」

「ワシの名はロン。魔術や錬金術、拳法、剣術。その他のすべての  
物事がワシにはできる！」

そのロンという名のガキは少し胸を張り、自慢げに言った。

「この・・・ガキは、本当にバカか・・・魔術とかそんな便利なもんあるわけ・・・ねえだろ・・・」

俺がまたいうと再び体中に電撃がはしった。

ぐっ！・・・。。。。。

ガキのくせに・・・調子にのり・・・やがって！

ゆっくりと肩で息をしながらそう思った。

「まだわからないのか！日頃、お前はどんなことをしでかしてるのかっ！！！」

ロンは声を張り上げて、怒鳴った。

「・・・・・・・・・・」

「それにワシはガキじゃない。こうみえても地球が産まれる前から生きておる。つまり神ということじゃ・・・」

「そんなバカな！？・・・魔術とか・・・地球が生まれる前から生きている神だとか・・・意味不明なこと・・・いいやがって！」

ビリビリビリッ！

「ぐわぁー！！！」

俺の体中に再び、電撃がはしった。

「全部ウソだというなら、窓の外をってみろっ！！」

ロンは、視線を窓に送った。

なっ！？なんだ、どういうことだ！？

見る見るうちに、夢路の目は驚きで真ん丸に近くなっていく。

窓の外を見ると地面がとても遠くに見えたのだ。

「俺・・・とっ・・・飛んでる！？」

「そう、これは次元転送列車 DIMENSION TRAIN。

次元を越え、過去や未来、そして魔界にまでも行ける列車じゃ。ちなみにこの列車内や異次元ではおまえらの世界よりかなり時間が経つのが遅いし、歳もとらないんじゃよ」

ロンはえっへんといわんばかりの顔をしている。  
正直いうとかなり腹が立つ。  
チビのくせに……。

「じゃあ一生、死なねーってことじゃねーかよ  
俺は自分でもわかるくらい嬉しそうにいった。

「もしや、一生おまえはここにいる気か!？」

ロンの眉がピクツと動いた。

「そのもしやだ」

そう答えたおとたん……。

「おまえは元の世界に戻る気が無いのかっ！」

ロンは手に持った杖を握り締めた。杖を漆黒の雷がまとう。

「見よ！これが我が得意魔術、黒雷くわらいじゃあああー！」

ロンが雷をまとった杖を俺の頭にポンと当ててきた。

はにゃ？

その攻撃はあきらかにゆるかった。

先ほどからの夢路の悲鳴を聞きつけ、二人の周りに集まってきた  
列車内の人々も何だ、あのへなちよ この攻撃は!？、とでも思っ  
ただろう。

それほど軽く、ロンは夢路の頭に杖を当てたのだった。

ところが……

「ギヤアアア~~~~~!!!!」

とたんに強力な暗黒の雷が夢路の体全身をはしった。

その後も夢路の体を数秒間、電流が流れていた。

「すっ……すまな……い」

俺は死に物狂いでさっきの発言を後悔し、謝った。

「ところで……な……んで俺がそんな……列車に乗せられ……

てる・・・んだ？」

俺は途切れ、途切れながら口から声を発した。

「ここにいる人たちは皆、罪を犯したり日頃の行いが悪かったりして社会に反していた人たちじゃ。日本人もおれば、外国人、魔界人などさまざまな人種の人たちがある。ワシの仕事は、そういうおまえ達を立派な人間に育てあげることじゃ。そのおまえが拾った切符がその罰じゃ」

「ん？どう・・・いうこと・・・だ!？」

ロンが何をいつているのか俺にはわからなかった。

「その切符は、おまえがここで仕事をし、立派な人間とみなされると穴が開く。つまり、おまえが仕事をし、立派になると元の世界に戻れるということじゃ」

「じゃあ、俺がもし切符を拾わなかったらどうなってたんだ？」

「それはないな」

ロンは俺の言葉をさえぎるように言った。

「なぜだっ!?!?・・・」

疑問が多すぎて頭が完全に混乱してきている。

「いったじやる。ワシは何でも出来るんじや。そう、あの時は時間を止めたということじゃ」

「・・・」

マジかよ！こいつ・・・マジで神じゃねーかよ。

改めてそう感じ、俺は度肝を抜かれた。

「それよりおまえ、早く仕事しろ!」

ロンは大声で言い放った。

「仕事つたつて・・・何をすれば・・・いいんだよ!？」

夢路の電撃による体への痺れは、まだ消えない。

「あそこに板が建つてあるじやる。あれは仕事板シヨブボードつていうんじや。

その仕事板の近くにある受付で依頼クエストを受注するだけじや」

「仕事、仕事って具体的に何をどうする仕事なんだよ!？」

「その仕事は次元を越え過去や未来、魔界に行き、自分が契約した依頼をこなす仕事。」

DIMENSION TRAVELERじゃ」

ロンは再び、自慢げな顔を見せた。

「そういえばおまえの名は？」

「あつ！俺の名前は向 夢路。よろしく・・・お願いします」

また、魔法を使われたりすると困るので、俺は少しかしこまってあいさつをした。

どうやら、不思議なことが多く、頭がからっぽになって自己紹介を忘れていたようだ。

「ふつ。そこまでかしこまらんでも・・・。夢路、この列車の03号車から好きな武器を選んでこい」

ロンはそういって、後ろを親指で指さした。

「03号車?・・・」

「あつ！うっかりしておった。案内がまだじゃったな。今、夢路とワシらがいるのが01号車、主に体を休める所じゃ。そしてこちらが02号車じゃ」

ドアがウインとなって開く。

「こちらの02号車がDr・メディソンの研究所じゃ」

そういって、ロンは、そこにいた白衣をまとった男を紹介した。

「はじめまして。向 夢路です。どうも」

俺は軽く、会釈をした。

どうやら、この30歳くらいの細い体で眼鏡をかけ、いかにもエリートですといわんばかりの顔の男がどうやらDr・メディソンだそうだ。

メディソンは、こちらをチラリとも見ずに

「はじめまして、こんばんは。メディソンです」

とだけ言い、再び、研究に取り掛かった。

「おいっ！もたもたせずについてこい」

ロンは、そう言つて、先に03号車がある後のドアに進みかけた。  
「お、おう！」

俺は研究が気になつた・・・というよりもメデイスンの態度が気に食わず、ブン殴つてやろうかとも思ったがロンに遅れまいと後を追つた。

もうひとつのドアが開き03号車に入ると、そこは倉庫のような所だつた。

「なんだ！この棒みたいなものは？」

そこには棒のようなものが無数にあつた。

「これは携帯変形武器 T ウエポン。おまえにひとつやろう。

このT ウエポンは、かつてのDIMENSION TRAVELERが使つてたものじゃ」

「やろつたつて、これどうやって使うんだ？」

「その質問は後でじゃ」

俺は、しぶしぶT ウエポンを手に取つた。

「その武器は、強くなりたいたいなどの強い気持ちを持ち、にぎれば変形し本来の姿になるんだ。そして、戻れと思つと元の姿に戻る」

「フーン。なるほどな」

俺は一人うなずき、そして納得した。

「ちなみに全部、最初の形は同じだが、変形するとこれひとつと  
いつて同じものは存在しない。つまり、どの種のT ウエポンを手  
に入れるかは運しだいということじゃ。どのDIMENSION  
TRAVELERもこれを持っておるから夢路、おまえも使える  
ようになつておけよ。最初に変形さすのは無理があるからまあ、あ  
せらすがんば・・・」

そこまでロンはいいかけたとき、バチィィィ という激しい音が  
聞こえた。

「な・・・な・・・なにごとじゃ！？」

驚き、音のするほうを見る。

すると、なんとそこには、変形したT ウェポンを持った夢路が立っているではないか。

「こやつ！まさか、たったの一回でT ウェポンを変形させたのか！！！！んっ！しかもあれは、もしや！？」

「なあ・・・なんだよ。この妙に殺気をするT ウェポンは！」  
俺が変形させたそれは、大きくていかにも斬れそうな黒いオーラが漂う鎌だった。

「そ・・・そのT ウェポンは・・・」  
ロンはゴクリとつばを飲み込んだ。

ふいに俺もゴクリとつばを飲み込んでしまったほどの殺気を満ちた鎌であった。

「次元をさまよい人ばかり斬り殺したために抹殺された伝説のDIMENSION TRAVELERが愛用したT ウェポン・・・人を喰らう大鎌、その名もヒューマンイーターではないか！！！！」

「ヒューマンイーター！？」

驚きのあまり俺は、声が裏返ってしまった。

「そう。これは伝説のT ウェポン、6Tシックスティのうちのひとつじゃ！」

「6T？」

「そう。6Tとは、ひとつはおまへの持つヒューマンイーター、そして影斬かげぎり、狂鬼きょうき。そして火・風・雷、三つの属性をつかさどる三種類のST ウェポンという種類のT ウェポン、この六つをあわせたのが6Tじゃ」

「何かよく分かんがスゲーな！」

俺は一人で勝手に感心していた。

「さあ。01号車の仕事板の自分のしたい依頼に練習がてら受注してこい！」

「お、おっつー！」

そして、俺は依頼板に向けて歩きだしたのだった。

仕事板の前にたどり着くと、さっそく依頼を見わたした。

「気になる依頼は、っと・・・三種の魔獣の血を採取せよ!？」

そこには、そう書かれていた。これはDr・メディスンの依頼と書いてある。

ロンの声が聞こえたので隣を見ると、いつの間にかロンが突っ立っていた。

「じゃあ、俺はこの依頼にいつてくるぜ」

ロンへのあいさつと受付をすませ、至急品の注射器を受け取った。

「ちなみに依頼には、おまえ以外のDIMENSION TRA  
VEILERも来ている場合もあるから気をつけるよ。そして必ず無  
事、依頼を成功させろっ!」

「おうっ!まかせろ」

「健闘を祈る」

俺とロンが会話を終わると、俺の体がスツと消え、視界が真っ白  
になって異界の地へと転送されていったのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2178u/>

---

DIMENSION TRAVELER 次元を旅する者たち

2011年10月9日07時58分発行